正倉院年報

この年報は昭和二十二年五月正倉院が宮内府圖書寮の主管となつた以後、昭和二十五年三月までの整理事業の概要を記述したものである。この間に行つた整理事業は裂類の整理と未調査寶物の調査とである。

一　正倉院古裂の整理

正倉院古裂の整理事業は去る大正三年より繼續して奈良帝室博物館正倉院掛において行はれて來たが、昭和二十二年五月正倉院が宮内府圖書寮の主管に屬してからも、依然その業を繼ぎ、正倉院管理事務の主要な一部として年々整理が施行されてゐる。引繼ぎ以降昭和二十五年三月までに整理を完了した主なものを掲げると左のとほりである。

一布　袍　　三十三領　附殘闕

白　布　袍　　一領　墨書「佐自努前守」背印字「淨衣」
同　　一領　墨書「草原少□」
同　　一領　墨書「銅工」「川原」「川原□万呂」
同　　一領　墨書「銅工」背墨書籠字「淨衣」
黄　布　袍　　一領　墨書「宍人子虫」
白　布　袍　　一領　處々朱花文を印する布片を以て補修す
同　　一領
淺紅細布袍　　一領　墨書「生部黒虫」
白　布　袍　　一領
褐色麁布袍　　一領
淺紅細布袍　　一領　墨書「東大寺」
褐色麁布袍　　一領　墨書「辛」
淺紅細布袍　　一領　墨書「□継衣淨」
白　布　袍　　一領　墨書「臺國守」、杉の箋を附す。墨書「額田（部）中和」「西厨内」
同　　三領
白細布袍　　一領　墨書「東大寺」
淺紅細布袍　　一領　墨書「東大寺」
同　　一領
白　布　袍　　二領
同　　一領　墨書「東大寺」
同　　一領
淺紅細布袍　　三領
白　布　袍　　一領
淺紅細布袍　　一領　墨書「小千足」
黄　布　袍　　一領　墨書「□（鳥カ）道」
白　布　袍　　一領
布袍殘闕　　袖五隻、衽一隻、前身下部斷片一片

布袍は當時官業に從事する諸工人に給せられた淨衣であつて人名を墨記するものが多い。中にも「銅工、川原□万呂」と記するものは珍らしい例であり、又背に「東大寺」或は「淨衣」とあるものなどは近世の印半纏を想起せしめるものである。これらの袍は相當着用後は返納されたものと見え汚損するものあり、破綻したものに繼當などが施されてゐるもの等がある。形式は上領（あげくび）、垂領（たれくび）の兩者があり、また右垂領、左上領としたものがあり、多くは白布麻で作られてゐるが、黄色、褐色又は紅色に染めたものも含まれてゐる。

一布　衫　　十領　附残闕

破陳樂布衫　一領　墨書「東寺古破陳樂布衫」　天平勝寶四年四月九日」

拍子布衫　一領　墨書「東寺唐散樂百子衫」　天平勝寶四年四月九日」

四鼓打布衫　一領　墨書「東寺唐散樂四鼓打衫」　天平勝寶四年四月九日」

傾㕝布衫　一領　墨書「東寺唐中樂傾㕝(杯)衫」　天平勝寶四年四月九日」

横笛布衫　一領　墨書「東寺唐散樂□笛衫」　天平勝寶四年四月九日」

布　衫　一領

鈴從布衫　一領　墨書「東寺狛樂鈴從布衫」　天平勝寶四年四月九日」

鈴布衫　一領　墨書「東寺狛樂鈴布衫」　天平勝寶四年四月九日」「尺八」「尺八」

擊鼓布衫　一領　墨書「東寺唐散樂擊鼓衫」　天平勝寶四年四月九日」

破陳樂布衫　一領　墨書「東寺唐古破陳□□」

沁河鳥布衫殘闕　墨書「東寺唐中樂沁河鳥衫」　天平勝寶四年四月九日」

布衫殘闕　墨書「長万呂」

布衫は肌着の類であつて、これ等の布衫は大佛開眼會日に當る天平勝寶四年四月九日に、唐樂、狛樂等に使用されたことは各領にそれぞれ記する墨書銘によつて知られる。かうした銘識が一々克明に記入されてゐることは正倉院寶物の一特色であり、古樂及び服飾研究に資する所が多い。

一絁襟布衫　十領

素方皮布衫　一領　墨書「前(ママ)呉公」「東大寺素方皮衫」　天平勝寶四年四月九日」

金剛鉾取布衫　一領　墨書「天平勝寶四年四月九日　後二　金剛桙取」　朱方印「東寺綱印」

笛吹布衫　一領　墨書「東大寺前二　笛吹　天平勝寶四年四月九日」　朱方印「東寺綱印」

金剛布衫　一領　墨書「後金剛」(朱方印)「東寺綱印」

布　衫　一領　墨書「東大寺□□□天平勝寶四年四月九日「吉」

同　一領　墨書「前二□□天平勝寶四年四月九日」

治道布衫　一領　墨書「前一治道衫」

師子布衫　一領　墨書「□□□東大寺師子衫」　天平勝寶四年四月九日」

布　衫　一領　襟及び胸紫絁

布　衫　一領　同　墨書「□□(東カ)□」　天平勝寶四年四月九日」

前項布衫と同形式であるが襟のみ白絁(あしぎぬ)を用ひたものと襟と胸部に紫絁を用ひたものとの二種がある。主として開眼會呉樂用として使用されたことがその銘識によつて知られる。

一貫頭布衫　五領　一領　墨書「東大寺」「東寺度羅樂久太衫」

一幅の布を二つに折り兩脇を縫ひ頸部を圓くくり抜いた極めて簡單な衫で、今のラニング・シヤツを思はしめる。これも樂服の類である。

一汗　衫　四領

貫頭布衫より更に簡素なもので、その丈は胸部に止まり肩を覆ふに過ぎない。古訓「かざみ」、汗取りの下着である。

一布　袴　十腰　一腰　墨書「王」「廣万」　一腰　墨書「天平寶字八年十月」

袴の様式に二種類ある。前で左右を合はすやうにした開股式のものと、股間に方形の襠裂を入れた閉股式のものとある。前者を表袴、後者を下袴(はかま)と稱する説があるが、いづれも袴の類ではなからうか。一腰に信濃國印を捺し、天平寶字八年十月と記するものは信濃國調庸布を用ひて作つたものである。

一布　裳　一腰

白布二幅のものの前裳で、今の前掛けに當るものである。優婆夷、厮女、雇女等が用ひたものである。

一布　接　腰　十三兩又三十隻

脚部に穿つ行縢(むかばき)の類で筒形をなし、下部に「足がら」を施すものもあり、上部に白絁の紵紐を附したもの。別に樂服に使用したものには錦の接腰がある。

一兩口布袋　六口

一　口　墨書「丙山」「東大寺」「山止萬」
一　口　墨書「甲」「東大寺前二」「馬人道無袴一
一　口　墨書「東大寺」「甲」
一　口　墨書「舟諸上緒懸緒」「丙」「東大寺」、「山止萬」、朱書「破」
一　口　墨書「乙」「山止萬」
一　口　（朱方印）「東寺綱印」

兩口に紐通を作り兩方で締めるやうになつてゐる。現に同種のもの二十八口が南倉にあるが、その名稱は兩口面袋とされてゐる。しかし面袋は製作形狀等も異り、又納められた面の名稱も墨記したものが別に存するから、恐らくは伎樂の裝束類を納れた衣裝袋であらう。

一布　袋　五口

一　口　墨書「信濃國水內郡中男作物芥子貳斗　天平勝寶二年十月」「大田」
一　口　墨書「袋重丸九兩小　青木香六斤小」
一　口　墨書「大伴國万呂」
一　口　朱書「東大寺寶物也」「東」
一　口　朱書「東大寺寶物」

芥子袋は信濃國水內郡中男作物である。芥子を納めた袋で珍らしい遺品で、調庸の制度を研究する上に貴重な資料である。（圖版第五の下）

一白　布　七帖

一獻物机褥裏殘闕並に淺綠目交纈纈絁二枚軸裝一卷となす。

一　枚　墨書「□大□（東）（寺）□物机□（獻）一枚（褥カ）□□尺三寸（長三）廣一尺八寸神護景雲二年□□三日（四月）」
一　枚　墨書「東大寺　獻物机褥一枚長三尺□寸（三）廣一尺八寸神護景雲二年□月三日（四）」

何れも褥（敷物）の裏裂のみ殘る。既知の類例によつて、神護景雲二年四月三日東大寺に行幸の際の獻物机の褥であつたことが知られる。寶庫に藏する獻物机に具するもの二枚、褥のみ存するもの數點は日付を同うする類品であるが、この一連の墨書は續日本紀の闕を補ふものである。

一黃綾斷片　十二片　軸裝一卷となす
一絹絁類斷片　三十一片　軸裝一卷となす
一十二支彩繪布幕殘闕　三片

麻布に淡彩で十二支を描いたものであるが、今は殘闕となつて右むきに走る猪の下半身とそれにつづく犬の前足の足先がある一片と、雞の頭部が遺る一片と、左むきの龍の下半身一片が殘るのみである。布一幅（約二尺四寸）を横に用ひ、上方に「チ」をつけたもので、その形の上から見れば高所に張り廻らすものであり宮殿の軒端などに張られたものであらうが、延喜式などに見える帽甲と見る説がある。奈良時代の繪畫及び文化史研究上貴重な資料である。

一布　作　面　二口

方形の麻布に墨で眼鼻口耳髯等を描き、口唇及び頰に丹彩を施し、眼球のところを切り拔き、上部の兩端に紐をつけて耳に懸け顏面にかぶるやうになつてゐる。文獻に徵するに唐樂に用ひられたものである。（圖版第五の上）

二　未調査寶物の調査

正倉院寶物臺帳作成のための調査は、大正十三年以降毎年行はれ戰時一時中絕の止むなきに至つたが、圖書寮の主管に歸してより再び調査を繼續することになつた。即ち昭和二十三、四年度において調査を終へたものは主として樂服絹絁布類及び筵席、葛箱、柳箱等であつて古櫃二十六合に納むるものである。

本調査の結果新資料の發見は少くなかつたが、これ等の中顯著なもの

を掲げることとする。

一勒肚巾　一條　葡萄唐草文紫綾、緋絁裏（圖版第四）

墨書「東寺狛樂駒形勒肚巾　天平勝寶四年四月九日」

樂服の腹帶である。內側中央に紐が付いてゐて、內で一度しばり、また兩端にも紐が付けられ、帶を左右から合せてしばるやうになつてゐる。帶の心は龍賓を編んだものの上に布がかぶせてある。これと同形式の帶は少からず收藏されてゐるが、勒肚巾の名があらはされてゐるものはこの一例だけで、名稱と用途がそのものによつて判る正倉院寶物の特色を示してゐる。幅一〇糎、長八二糎

一崑崙用具　一雙　紫綾表、赤生絁裏

墨書「東大寺前二崑崙　天平勝寶四年四月九日」

吳樂崑崙用具であつて、御物目錄に「狀如涎掛」とある。しかし、二十五の襞をとる垂は丈短く九糎許ではあるが、幅廣く約三十三糎もあるから、恐らくは腰裳の一種であらう。

一吳公前垂　一條　夾纈羅、緋絁裏

墨書「前一　吳公前垂　東大寺　天平勝寶四年四月九日」

形狀後世の前垂と變るところがない。ただ上邊の帶の上に更に小紐を付してあるのに注意すべきである。

竪四五糎、幅上邊三一糎　下邊五四糎

一吳女背子　一領　赤地錦、黃絁裏、紫地錦裾

墨書「東大寺　前吳女六年」

背子は和名抄に「和名加良岐沼」とあり、「形如半臂無腰襴之袷衣也」又「婦人表衣、以錦爲之」とある。半臂は極く短くとも袖があるが、これは全く袖がないけれども、まづ大樣は半臂に似たものであり、裾が著いてゐるが、比翼仕立で襴とは云へないし、錦を用ひた袷であることなど、和名抄の記載に合ふところが多い。もしこれが背子に相當するものであるならば、服飾史研究上最古の遺品で貴重なものである。

一迦樓羅裏　一條　黃絁、白絁裏

墨書「後迦樓羅六年」「九物」（朱印）「東寺綱印」

今の風呂敷に相當するものであるが內外に夫々紐を付してゐるところが異る。內側の紐で包むものをしばり、包んだ上を又外側の紐でしばる仕方である。銘識によつて吳樂迦樓羅用具九物を納れた裏であることが知られる。竪橫九九糎。（圖版第六の左）

一力士脛裳　一兩　紫地長班錦、白絁裏

墨書「東大寺前一力士□□□寶（天平勝）四年四月九日」（朱印）「東寺綱印」

脚絆の一種であつて吳樂力士の着用したもので上邊に紐が付けてある。竪四一糎、幅三〇糎

一白絁脛裳　一隻　錦緣、白絁裏、麻布心

墨書「東寺吳樂前二　天平勝寶四年四月九日」

御物目錄に脛裳とあるが、その形狀は筒形をなし、前揭力士脛裳と甚だ異る。下部に白絁の「足がら」を付した痕跡を留めるところから察すると接腰に類するものではなからうか。

竪長徑四二糎　短徑二九糎　幅上邊二五糎　下邊一五・五糎（圖版第六の右）

一笛吹襪　一兩　紫地花文錦、生絁裏

墨書「後二笛吹襪　天平勝寶四年四月九日　東大寺」

襪（たびぐつ）は下履（したぐつ）の義で、一隻に緋絁の紐を殘す。正倉院に藏する襪のうちで紐を存するものは、この一例を遺すのみである。深二〇糎、底長二七糎。（圖版第三の下）

一綠地錦覆　一口　赤絁裏

その形宛も棊局を被う覆に似るところから、御物目錄には棊局覆と記するが、竪六六・五糎、橫四九・六糎の長方形なるより推察するに正方形をなす棊局に用ひる覆ではなく、箱又は小几の覆であらう。（圖版第三の上）

一不詳樂用具　一腰

淡綠の帶に幅一六糎、長八〇糎の脚を四ケ所に垂れる。各垂脚は錦を上にし紅、藍、綠、纈纈絶等四枚を重ねた極めて美麗なものである。使途は詳かでないが腰に覆ふ樂服の類であらう。

一柳箱殘闕　一隻

朱書「納人勝箱」

竪三三糎、横三四糎、深八・五糎の長方形の柳箱であるが今蓋を佚して身を存す。人勝は齊衡三年雜財物實錄によると、天平寶字元年潤八月二十四日の獻物であつて金薄綵繪木鞘大刀子一口と共に斑蘭箱一合に納められてゐたことが記されてゐるが、いつの程にかこの箱を人勝箱として用ひられたものであらう。人勝は今殘闕となつてゐるが北倉に存する。

（松島順正記）